魚の棚商店街における継続居住層の住まいと暮らし

明石市「魚の棚商店街」における戦後の店舗空間変容に関する調査研究 その2

THE HOME AND LIVING OF CONTINUOUS RESIDENCE IN "UONOTANA SHOPPING STREET"

- Research about a store space transformation process of postwar "Uonotana Shopping St." in Akashi city Part 2 -

嶋田 邦男*, 櫻井 康宏**

Kunio SHIMADA and Yasuhiro SAKURAI

This paper grasped about a house and a living from the form(step, line type) of the house by a floor plan and hearing for the continuation residence layers of "UONOTANA Shopping Street" in the center of Akashi-City at about 1960 and considered the change with the later house improvement action through an example.

The separation of dining and sleeping room was difficult, and the then living was considerably inferior residence environment.

There are many cases which maintain "a street garden type" by the enlargement, but changes by the rebuilding to "n-LDK type" of "the stairs hall type".

Keywords: Inner city area, Residence Continuation, House with store, House improvement, Separation of stores and housing

中心市街地, 居住継続, 店舗併用住宅, 住宅改善, 住商分離

1. 研究の目的と方法

本研究は、「商店街活性化のためには居住の継続性(経営者家族が商店街に住み続けること)が重要である^{注1)}」という観点から、明石市の中心市街地において強い個性と活気を維持し続けている「魚の棚商店街」^{注2)}を対象として、昭和35年頃から現代(調査時点(平成21年))にかけての店舗空間変容^{注3)}の実態を「居住の継続性」との関係で考察することを基本的な目的とするものである。

前稿(その1)¹⁾では、史料と統計資料をもとに明石市の中心市街地および「魚の棚商店街」の概要を整理した上で、経営者対象アンケート調査(平成15年実施、有効回収数72件、回収率89%)によって、店舗経営に関わる基本指標(営業始期、業種、土地建物所有関係、建物構造、階数、面積、従業員数、住込み従業員数)について「昭和35年頃」と「調査時点」の2時点の実態を明らかにし、さらに、経営者家族の居住形態変容と住宅改善行動について以下の諸点を明らかにした。

①居住形態変容の実態は表1に再掲のとおりであり、「全員転出型(以前は店舗併用住宅であったが現在は店舗だけである)」「専用店舗型(ずっと店舗だけである)」の両者で48件(70%)を占める一方、「居住継続型(ずっと店舗併用住宅で家族全員が住み続けている)」

は9件(13%)、「一部転出型(ずっと店舗併用住宅であるが家族の一部が別の所に転出した)」は11件(16%)となっている。

②住宅改善行動については、「居住継続型」では建替え5件、増築2件、改修2件、「一部転出型」では建替え6件、増築3件、改修1件である。「居住継続型」の大半は木造の1~2階建から非木造の2~3階建に建替えて、建築面積・延床面積とも大幅な拡大によって居住環境を改善している。「一部転出型」も木造の1~2階建から非木造の3~4階建に建て替えて規模拡大しているが、その変化率は「居住継続型」より小さい。

③「一部転出型」は子世代の転出(職住分離)によって居住環境の改善を図り、親世代が店舗併用住宅に住み続けているが、子世代もほとんどが通いで後継者となっている。

④「全員転出型」は、借地が多いこともあり、職住分離によって居住環境の改善を図っている。ただし、中心市街地隣接地区^{注4)}に住居を求め、親世代と子世代が同居し、子どもが後継者となっているケースが多い。

以上を踏まえて本稿では、入手した建物平面図^{注5)}と経営者家族へのヒアリング(平成15年以降近年までに断続的に実施)により、昭和35年当時の商店街の空間像と生活像を把握した上で、上記の居

* 明石市役所

** 福井大学 名誉教授・工博

AKASHI City Government
Prof. Emeritus, Fukui Univ., Dr. Eng.

住継続型と一部転出型(本稿では両者を合わせて「居住継続層」とする)の住宅改善行動に伴う変化を検討することを目的とする。空間像をタイプ分けする方法については、町家の間取りと関連して西山卯三によって定式化された「段・列型(1階平面における間口方向の部屋数を列、奥行方向の部屋数を段とする)^{注6)}」を採用した。同様の方法で併用住宅の住宅改善行動を論じたものに片方・柴田・清水・坂東等による先行研究^{2)、3)、4)、5)}があるが、その対象が友禅染色等の伝統産業併用住宅(手工業併用住宅)である点と、その住宅改善行動が小規模改善(木造の空間構成の特性を残して行われた小規模改善で建替え等の大規模改善が含まれない)に限定されている点において、本研究とは性格を異にしている。

なお、西山卯三はその著『日本の住まいⅠ(増補版)』⁶⁾で増補された「併用住宅」の章において、「発生・発展の歴史的すじみちからいえば、むしろ生業の営みをもっていた住宅、つまり『併用住宅』の方がさきにあり、そこから生業とくっついた生活を次第に別の建物として空間を分離させてきた結果(これを『純化』といえるかどうかは疑わしいが)、『専用住宅』が生まれてきたのである」と指摘した上で、『職』が『住』を圧迫し侵食するような、貧しさと結びついた併用住宅は好ましいものとはいえない。しかし職住の分離は必ずしも進歩とはいえない。様々な新しい内容をもった『併用住宅』が、専用住宅にゆとりをもたらす発展の中で生まれてくるかもしれない」と述べている。このような歴史的観点から本研究の目的を位置づけるならば、「併用住宅」から「専用住宅」への移行が主流となった時代(昭和30年代後半以降)に「居住継続」や「一部転出」によって「併用」としての性格を維持続けた住宅(継続居住層)を対象に、①かつての商店街での店舗併用住宅の住まいの空間と暮らし方を再現することと、②その後の住宅改善による変化を明らかにすること、の2点になる。

表1 居住形態変容の類型化				単位:件	
店舗併用住宅	46	転出なし	9	居住継続型	9
		転出あり	37	一部転出型	11
				全員転出型	26
専用店舗	22			専用店舗型	22

注:昭和35年当時から調査時点への居住形態変化のタイプ分けである

2. 昭和35年頃の商店街の概況

入手できた建物1階間取り図65件を、商店街地番図(戦災復興土

図1 昭和35年当時の魚の棚商店街1階概況図

地区画整理事業従後の区画)に配置したものが図1である(間取り図は従前のものであるため整合がとれていない部分もみられる)。図中、T1~T10はその後に建替え、Z1~Z6はその後に増築、K1~K3はその後に改修を実施した併用住宅であり、△印は分類不能(列・段では表現できない「その他」の間取り)、◎印は住商別棟の住宅(店舗棟の奥に専用住宅棟^{注7)})、×印は専用店舗、無印は「全員転出型(その後に専用店舗化)」に該当する。また、無記入の敷地は「建物なし」の空地ではなく「間取り図なし(データ入手不能)」の敷地である。

図1の全体からみて、南側街区(③④⑤⑥街区)に比して北側街区(①②街区)の奥行が深いこと、大半が「通り庭型」の間取りであること、東南の⑥街区に小規模専用店舗が集中していること等が分かる。なお、記載の間取り図の奥に「離れ」を有することが実際には多かったと思われるが、残念ながら不詳である^{注8)}。

図1を基に、段・列型を住宅種別・階数別に示したものが表2である。全体では「1列2段」22件(34%)、「1列3段」19件(29%)の両者で大半を占め、2列タイプは「2列2段」の1件のみである。住宅種別には、住商別棟の住宅では「2段」、併用住宅では「3段」以上の割合が相対的に高く、平屋の併用住宅でとくに高くなっている。なお、表中の「その他」16件は「専用店舗」と「分類不能」の合計であるが、併用住宅と違って平屋の割合が高くなっている(専用住宅も平屋の割合が相対的に高い)。

上記のように1列タイプが大半のため、表3に示すように敷地の間口による段・列型の変化はみられないが、表4の敷地奥行別にみると、15m未満では「1列2段」、15m以上では「1列3段」以上の割合が高くなっている。なお、「その他」は奥行15m未満に集中し、間口も4m未満の比重が高いことから、小規模敷地の割合が高いことが分かる。

表5によって併用住宅44件について業種別にみると、「1列3段」以上の割合が高いのは「魚の棚」を象徴する鮮魚と焼物・焼物であり、逆に「1列2段」以下の割合が高いのは飲食、その他である。

一方、段・列型と昭和35年当時の家族人数の両方が分かる32件について、その関係を示したものが表6であるが、両者には対応関係がみられない(段数が増えるほど家族人数が増えるわけではない)ことが分かる。

表2 S35当時の住宅種別・階建別にみた段・列型							単位：件		
		1列1段	1列2段	1列3段	1列4段	2列2段	小計	その他	合計
店舗併用住宅	平屋	0	3	5	2	0	10	0	10
	2階建	1	13	13	3	0	30	4	34
	小計	1	16	18	5	0	40	4	44
住 商別棟の住宅	平屋	1	3	1	0	1	6	0	6
	2階建	0	3	0	0	0	3	0	3
	小計	1	6	1	0	1	9	0	9
専用店舗*	平屋	0	0	0	0	0	0	8	8
	2階建	0	0	0	0	0	0	4	4
	小計	0	0	0	0	0	0	12	12
合計		2	22	19	5	1	49	16	65
*作業場平家1件含む									

表3 S35当時の敷地面積別にみた段・列型							単位：件		
		1列1段	1列2段	1列3段	1列4段	2列2段	小計	その他	合計
4m未満		2	7	5	3	0	17	10	27
4m～8m		0	14	13	2	1	30	6	36
8m以上		0	1	1	0	0	2	0	2
計		2	22	19	5	1	49	16	65

表4 S35当時の敷地奥行別にみた段・列型							単位：件		
		1列1段	1列2段	1列3段	1列4段	2列2段	小計	その他	合計
～15m		1	12	3	0	0	16	14	30
15m以上		1	10	16	5	1	33	2	35
計		2	22	19	5	1	49	16	65

表5 S35当時の業種別にみた段・列型(店舗併用住宅のみ)							単位：件		
		1列1段	1列2段	1列3段	1列4段	2列2段	小計	その他	合計
鮮魚		0	2	5	1	0	8	3	11
練物・焼物		0	0	2	2	0	4	1	5
乾物		0	1	1	0	0	2	0	2
青果		0	1	0	0	0	1	0	1
飲食		0	4	1	1	0	6	0	6
衣料		0	1	3	0	0	4	0	4
その他		1	6	5	0	0	12	0	12
不明		0	1	1	1	0	3	0	3
計		1	16	18	5	0	40	4	44

表6 S35年当時の家族人数別にみた段・列型(店舗併用住宅のみ)								単位：件	
	1列1段	1列2段	1列3段	1列4段	2列2段	その他	間取不明	計	
1人	0	1	0	0	0	0	1	2	
2人	1	0	0	0	0	0	2	3	
3人	0	0	1	0	0	0	2	3	
4人	0	1	4	0	0	1	1	7	
5人	0	2	1	1	1	0	2	7	
6人	0	1	1	0	0	0	1	3	
7人	0	1	2	0	0	0	1	4	
8人	0	1	1	0	0	0	1	3	
計	1	7	10	1	1	1	11	32	

表7 S35当時の居住形態変容類型と段・列型(店舗併用住宅のみ)							単位：件		
	1列1段	1列2段	1列3段	1列4段	2列2段	データ無	その他	計	
居住継続	0	4	3	1	1	0	0	9	
一部転出	0	2	2	1	0	4	1	10	
計	0	6	5	2	1	4	1	19	

表8 S35当時の住宅改善行為別にみた段・列型(店舗併用住宅のみ)							単位：件		
	1列1段	1列2段	1列3段	1列4段	2列2段	データ無	その他	計	
建替	0	2	3	0	1	3	1	10	
増築	0	3	1	1	0	1	0	6	
改修	0	1	1	1	0	0	0	3	
計	0	6	5	2	1	4	1	19	

3. 昭和 35 年頃の住まいと暮らし

ここでは前稿で把握した「居住継続型」と「一部転出型」の世帯 20 件を対象としたヒアリング調査の結果を基に、いくつかの典型事例を通して昭和 35 年頃の「住まい(空間像)」と「暮らし(生活像)」の実態を明らかにする。なお、当該 20 件(その後の倒産を除く 19 件)について、段・列型と居住形態変容類型・住宅改善行為の関係を示したものが表 7、表 8 であり、「居住継続」と「増築」は「1 列 3 段」よりも「1 列 2 段」の方に目立っている。

(1) 暮らしの背景(朝市・昼市)

各世帯の暮らしに先立って、「魚の棚商店街」の経営と生活のリズムを規定している朝市・昼市を中心に、資料とヒアリングで把握した「暮らしの背景」を整理する。

昭和 53 年に卸売市場が移転するまで、明石港で朝市は 4 時半より約 2 時間、昼市は 12 時より約 2 時間行われていた。鮮魚店は、朝市の準備のため 2 時に起床し、港へ行き、入港している船や入港してくる船の魚を覗て値踏みをしていた。

現在の明石・淡路連絡船乗り場西隣に狭いながらも明石浦市場があったが、淡路から持ち込まれる魚はそこでセリにかけず、魚の棚の市場でセリにかけられることが多かった。これは魚の棚の市場の方が取引の値段がよかったためである。しかしながら、淡路に漁業協同組合ができてからは、ここを通して取引先が決められるようになり、持ち込まれる魚は少なくなった。とはいえ、バブルまでは漁業協同組合を通さずに明石の昼網に持ってくる漁師も多く、魚も豊富で人出も多かった。

また、卸売市場ができるまでは、全国で水揚げされる魚(サバ、アジ等)を仕入れに行つて魚の棚で仲卸をしていた。7 時頃、神戸の市場で仕入れた車が返つて来て、その車が南北の道路で荷降ろしを終えるまで、歩くのも苦勞するほどぎっしり止まっていた。

このように、魚の棚商店街では、隣接する明石港で早朝からセリが行われていたため、荷受け、仲卸、小売りの全てが兼ねられ、鮮魚店のみでなく、関連した業種の店舗が多く立地し、早朝から人出も多く、賑わっていた。

(2) 1 列 3 段型の住まいと暮らし

事例 1(表 9①)：Z3(豆腐店)

創業 100 年以上続く豆腐店で、敷地は間口が 5.3m、奥行が 32.3 m、敷地面積が 168 m²であり、1 列 3 段型で離れのあるタイプである。1 階は道路側より店舗、祖父母の寝室の和室、食事・休憩に使用する和室と続き、祖父母の寝室も家族・従業員の食事・休憩に使用されていた。2 階は夫婦の寝室となっており、夫婦の食寝分離はできていた。一方、住込み従業員は離れ(平屋)の倉庫等で寝泊まりしていた。通いの従業員は 5 時に出社し、朝食をとった後仕事を始め、夜 7 時頃、仕事を終え自宅に帰り晩ご飯を食べる生活であった。

このような中で、主婦は昭和 30 年代まで朝は 0 時半に起床し、ボイラーに石炭をくべ火をおこし、豆を臼で挽き、釜で炊くなど豆腐の仕込みや家族・従業員の賄いに時間を要していた。昭和 37 年に加工工程に機械を導入するようになり、ようやく 4 時起床となるが、その後も昼の賄い、店の手伝い、夜の支度(ごはん、風呂等)に追われる一日を過ごしていた。また、当時は 7 人の住み込みを含め 20 人の大所帯で風呂も薪で焚くため時間もかかり、最後に入る時にはお湯もない状態であった。就寝は午後 10 時前で 3 時

間程度の睡眠しかとれなかった。このような状況を揶揄して、魚の棚に嫁いでくる嫁に「知って来たか、知らずに来たか、地獄八丁の魚の棚」という言い習わしがある。

事例2(表9②)：T7(焼あなご店)

130年以上続く老舗の焼あなご店で、敷地は間口5.2m、奥行25m、敷地面積187㎡で、建物は木造2階建延べ面積132㎡の1列3段型の奥に離れ(平屋)がある。1階は店舗、和室4帖、和室6帖と続く3段構成で、奥の離れは作業場として使用している。2階は納戸と和室8帖で構成されている。また、東隣は貸店舗(併用住宅)として貸していた^{注9)}。

昭和35年当時は、1階に祖父母が、2階の和室に親子5人が同室で就寝していた。また、この頃は、住込み従業員も奥の作業場で生活をしていた。

昭和36年に魚の棚商店街のアーケードができ、アーケードと住宅の隙間から雨がアーケードに入るのを防ぐため、アーケード側に2階の和室を一部拡張している。

また、子供が中学生になる頃(昭和37年)に、離れの2階建を裏庭に増築し、子供の成長に伴う就寝分離を図っている。既存の作業

場に接する増築で、作業場に付属する倉庫と従業員室と子供部屋をうまく組み合わせている。作業場に接して倉庫、そこから従業員の就寝する2階和室へとつながっている。一方、子供部屋は1階と2階にそれぞれ和室2室を配置し、母屋から縁側を通って行く動線となっており、従業員室とは行き来できない間取りである。

このように、増改築を繰り返し、店舗の充実と居住環境の向上を図っている。

昭和35年当時は、食事を店に隣接する和室4帖でとり、ここは開店中の休憩場所にも利用され、また団らんの場所でもあった。しかしながら、狭いこともあり、祖父母の就寝場所である1階和室6畳を使用することも多かったという。食寝非分離、就寝非分離で、まさに西山の指摘のように、店舗が住宅部分を圧迫し侵食していた状況がうかがえる。

早朝3時には起床し、準備や仕入れ、加工作業を行い、7時には店を開け、市場に仕入れに来る人対象に焼あなごなどの商品を販売していた。また昼は地元の人、三木市や小野市から来る買い物客対象に小売を行い、夜も午後7時頃まで通りの人出も多く、店を開けていた。後片付け、晩ご飯を済ませ就寝は早くても午後10時を過

表9 1列3段型の住まいと暮らし(昭和30年～昭和35年頃)

	① T3	② T7	③ T3
1 ヒアリング対象者	祖母(81)	夫(65)	夫(71)、妻(長女)
2 居住形態変容類型	居住継続	居住継続	一部転出
3 業種	豆腐→菓子→(S50年に別敷地で青果開店)	焼あなご	飲食店
4 創業時期	創業約100年	創業約130年	創業約60年
5 従業員数	16人(うち住込み7人)	8人(うち住込み2人)	6人
6 構造/階数/建築年	木造/2階/S25	木造/平屋/S25⇒2階建/S35	木造/2階/S35
7 敷地面積/延床面積	168㎡/135㎡	187㎡/132㎡	62㎡/66㎡
8 敷地間口	5.3m	5.2m(隣接する貸店舗を除いた間口)	4.5m
9 住宅の形式(段・列型)	1列3段・離れ	1列3段・離れ	1列3段
10 世帯構成	4人(両親、夫婦)	7人(祖父母、両親、子供3人)	5人(両親、子供3人)
11 各階室構成	1F 店、和室6、和室8、炊事場、便所、風呂 2F 和室8 離れ 作業場、倉庫	店、和室4、和室6、炊事場、便所、作業場 和室6、納戸4 平屋(作業場(兼住込みの就寝場所))	店、和室4、和室6、炊事場、便所、作業場 和室6、納戸8 作業場、倉庫、2階建(和室5室、納戸)
12 各階・各室の使い方	1階8帖：祖父母 2階6帖：夫婦 ・就寝場所 ・団らん場所 団らん(食事)：1階8帖 裏庭に別棟と2階を増築(時期等詳細は不明)	1階6帖：祖父母 2階：夫婦＋子供3人 団らん(食事)は1階和室4帖 S35年に2階増築	1階6帖：祖父母 2階：夫婦 離れ：子供3人 団らん(食事)は1階和室4帖 S36に2階を道路側に一部増築 S37年に裏庭に2階建を増築
13 増築・改修履歴			S45 駅前復興土地地区画整理事業後の土地を取得し、S55に建替え(現建物)
14 調査対象事例各階平面図及び配置図	S30年頃	S35年頃まで	S37年以降
【凡例】 店：店舗 作：作業場 和：和室 洋：洋室 台：台所 厨：厨房 事：事務所 浴：浴室 WC：便所 倉：倉庫 納：納戸 炊：炊事場	各階平面図 		
断面図(使い方)			

ざる日々を暮らしていた。

事例3(表9③)：T3(飲食店)

明石の食材を使った料理を提供する飲食店を60年以上営んでいる。1列3段型で、敷地規模は間口4.5m、奥行12.9m、敷地面積が62㎡、建物規模も木造2階建てで延床面積が66㎡と小規模である。

1階は全て店舗で店、厨房、和室(店)の3段構成となっている。2階は和室が3室あり、昭和35年頃は親子5人が2階の6畳で密集就寝していた。また、団らんは、店終了後、1階店舗の和室4.5帖が使用され、冬場になると炬燵を囲んで、親子5人の就寝場所としても利用されており、食寝非分離、就寝非分離であった。また、2階の主寝室である6帖からは明石公園での花火が見えたこともあり、店舗としても利用され、居住部分にまで店舗部分が侵食し、渾然一体の利用の一端がうかがえる。

この敷地規模では、子供の成長に合わせた個室の確保ができないなど、家族全員(親子5人)が住むには手狭であったため子供の就職や結婚による転出により、居住空間を確保しながら親のみが残って店舗併用住宅として居住継続していた。結婚により転出した長女は通いで親の店を手伝っていたが、親の引退を機に、長女の夫が昭和55年に鉄骨造4階建ての店舗併用住宅に建替え、隣接地区のマンションから親子5人で戻り、住と商を同一場所化している。この時、長女の両親は隣接地のマンションに転出している。

飲食店でも、早朝3時頃には起床し、仕込みを行い、朝のセリが終わる頃にはセリ関係者や仕入れに来る顧客に食事を提供するなど早朝から商いを営んでいた。

(3) 1列2段型の住まいと暮らし

事例4(表10④)：Z1(衣料品店)

昭和35年当時は衣料品店で、敷地は間口が5.1mで奥行きが19.2m、敷地面積が98㎡と小規模である。建物規模は、昭和24年に建てた店舗併用住宅で木造2階建て、延床面積57㎡と小規模な1列2段型で、1階が店舗と祖父母の寝室で、食事室も兼ねており、2階が夫婦と子供5人の就寝場所、食寝非分離、就寝非分離である。

当時は下ごしらえ等の不要な業種でセリとの関係も薄く、商店街に訪れる顧客対象の小売であるため、早朝から店を開けることはなかった。

事例5(表10⑤)：T10(鮮魚店)注10)

敷地規模は間口が3.9m、奥行が14.2m、敷地面積が56㎡で、建物は木造2階建て、延床面積70㎡と小規模な1列2段型で、1帖の板間が店に面してあるが、極小規模のため1段には数えていない。実情としても店舗の一部として利用されていた。

1階は店舗と和室で、2階は和室が2室ある。1階の和室は食事と両親の就寝場所として利用し、2階は納戸と子供の就寝場所として使用し、食寝非分離、就寝非分離の状況であった。

鮮魚店では4時半に始まる朝市に合わせて2時過ぎには起床していた。セリが始まると、セリと並行して、買い付けた魚の運搬、帳簿の整理などに追われ、人手もたくさん必要であった。

7時に朝食をとり、その後、買い付けされた魚を仲卸としてそれぞれの店に運び、後片付けをしていると昼市の時間になる。昼食は片付けの後のちょっとした時間や暇な時間に取っていた。11時半には、昼市の準備で、今日はどんな魚が水揚げされているか、どれくらいの値で買うかの下見に行っていた。

12時から昼市が始まり、競り落とした魚を得意先に配達して仕事を終えるのが午後4時頃になる。一方、店では残った魚の小売をしていた。いずれの仕事も従業員をはじめ人海戦術でこなしていた。

午後5時に夕食をとり、その後、風呂(隣接の銭湯)に入って遊び(酒場等)に出かけ、午後10時か11時に就寝する毎日を過ごしていた。主婦はこのサイクルに合わせ家事と仕事に追われていた。

卸売市場の移転(昭和53年)に伴い、仲卸の時間帯の商売がなくなり、朝は時間的に余裕ができた。一方、家事においても炊飯器、洗濯機などの電化商品やLPガスの普及に伴い、主婦の家事労力が軽減され時間的に余裕ができた。

4. 住宅改善後の住まいと暮らし

建替え・増築・改修に伴う構造・階数・建物面積・建蔽率・容積率の数値的变化については既に前稿で述べている。ここでは、入手した図面とヒアリングの結果を基に、住宅改善後の空間像(間取り)と生活像(家族の室保有と位置関係)の概要を明らかにする。

表10 1列2段型の住まいと暮らし(昭和30年～昭和35年頃)

	④ Z1	⑤ T10
1 ヒアリング対象者	夫(77)	夫(72)
2 居住類型	居住継続	一部転出
3 居住形態変容類型	衣料・飲食	鮮魚
4 業種	創業約50年	創業約110年
5 従業員数	2人	6人
6 構造/階数/建築年	木造/2階/S24	木造/2階/S24
7 敷地面積/延床面積	98㎡/57㎡	56㎡/70㎡
8 敷地間口	5.1m	3.9m
9 住宅の形式	1列2段	1列2段
10 世帯構成	8人(両親、弟、長男夫婦、子供3人)	4人(両親と子供)
11 各階室構成	1F 店舗、和室3帖、炊事場 2F 和室3、和室7.5 離れ 詳細は不詳だが、奥に増築をしている	店舗、板間1、和室4.5、炊事場、便所 和室4.5、和室6
12 各階・各室の使い方	就寝：1階は祖父母、2階は兄弟と親子 食事：1階和室 ・就寝場所 ・団楽場所	就寝は2階 食事：1階和室
13 増築・改修履歴	S53年に裏庭にS造2階建てを増築	H13年にS造2階建てに建替え
14 調査対象事例各階平面図及び配置図	S30年頃	S30年頃
【凡例】 店：店舗 作：作業場 和：和室 洋：洋室 台：台所 厨：厨房 事：事務所 浴：浴室 WC：便所 倉：倉庫 納：納戸 炊：炊事場
断面図(使い方)

(1) 商店街の概況

昭和 35 年頃の図 1 と対比するため、調査当時(平成 21 年)の商店街全体の概況(建物1階間取図)を示したものが図2^{注1)}である。作成にあたっては、建替えや増築の状況については建築計画概要書を、その他建物の輪郭等については都市計画地形図や航空写真を参考にし、必要に応じてヒアリングで補足した^{注1 2)}。一見して、建物面積の拡大と1階部分の店舗専用化の傾向を読み取ることができる。

(2) 住まいの概況

住宅改善後の空間像(間取り)として、表 11 には建替え事例3件を、表 12 には増築事例2件を示した。

T3 の現況(表 9③の建替え後) 表 11①

建替えるに際し、飲食店を経営するには仕込み等を考慮すると店舗と住戸が同一場所の方が便利との考えから店舗併用住宅を選択している。敷地面積が 62 m²と狭小のため、4 階建とし、延床面積 172 m²で、1 階と 2 階を店舗に、3 階と 4 階を居住空間とし、3 階を世帯主夫婦が、4 階を子供が利用し、家族全員の居住空間(個

図 2 平成21年当時の魚の棚商店街の1階概況図

表11 建替え住宅の現況		① T3	② T7	③ T10
1	構造/階数/建築年	S造/4階/S55	S造/3階/H10	S造/2階/H13
2	敷地面積/延床面積	62㎡/172㎡	187㎡/357㎡ (東隣の貸店舗拡張後 244㎡/422㎡)	56㎡/106㎡
3	現在の世帯構成	2人(夫婦)	4人(夫婦、子供2人)	1人(夫)
4	各階室構成	1F 店、厨房、便所	店、作業場、休憩室、便所	店、事務所、湯沸し、便所
		2F 和室2室	LDK、和室2室、風呂、洗面	台所(DK)、洋室、風呂、便所
		3F 和室2室、台所、風呂、便所	洋室4室、納戸	
		4F 洋室、洗濯		
5	調査対象事例各階平面図及び配置図	平成21年頃 	平成21年頃 	平成21年頃
6	断面図(使い方)	<p>子 子 食事 夫婦 店 店 店と作業場</p>	<p>子 子 子 夫婦 食事と団らん 親 店と作業場</p>	<p>夫婦 食事 事務所 店</p>

室)を確保している。食寝分離、就寝分離を可能とし、上下階で店舗と住宅を完全分離することで店舗環境と居住環境の向上を図っているが、間口が狭いため、玄関は店舗と兼ねざるを得なかった。

その後、子供の成長に伴い、子供たちは結婚や独立により、隣接地区のマンション等に転出している。現在は、世帯主夫婦のみが3階、4階で居住し、主に3階が生活の場となっている。

T7の現況(表9②の建替え後)表11②

平成10年の建替えにより、建物規模も店舗部分117㎡、居住部分240㎡とさらに大きくなっている。また、「焼きあなご」という業種の性格上、早朝や夜遅くの仕込みが必要で、住商が同一場所である方が便利であるとの考えから店舗併用住宅として建替えている。1階は店舗・作業場と事務所、2階と3階を住宅とし、2階には団らの場としてLDKと母の部屋、3階には親子の個室を配し、また住宅専用の玄関も店舗とは別に整備している。建替えにより、上下階で店舗と住宅を完全分離し、店舗拡張と居住環境の向上を実現している事例である。また平成18年には東隣の貸店舗も自店舗として拡張し、焼きあなごが飲食できる店舗として使用している。

T10の現況(表10⑤の建替え後)表11③

昭和24年に建てた建物の老朽化に伴い、平成13年に木造2階建を鉄骨造2階建に建替えている。1階を店舗と事務所、2階を洋間とDKとした居住空間で、上下階で店舗と住宅を完全分離している。敷地が狭く高層化も望まず、子供世帯が隣接地に転出し食寝分離と就寝分離を可能とし、店舗環境と居住環境を向上させている。現在

は、親1人が2階で居住している。

Z1の現況(表10④の増築後)表12①

昭和53年、子供の増加と成長に合わせて、敷地奥に鉄骨造2階建を増築し、延床面積が57㎡から140㎡と建物規模を約2.5倍に拡大している。店舗部分は1階に12㎡から69㎡を確保し、住居部分は45㎡から82㎡に拡大し、2階に居住諸室を確保し、店舗と居住環境を向上させ、食寝分離、就寝分離を図っている。

S56年に飲食店に業種変更して現在に至り、結婚により転出した子供が通いで店を引き継ぎ、両親は夫婦2人で増築した2階に居住しているが、食事は1階でとっている。

Z3の現況(表9①の増築後)表12②

現在、経営者は5軒西隣の敷地で青果店を営んでおり、当該敷地は貸店舗として他人に貸し出されている。表12の図面は移転する前の経営者の住まい方を示している。増改築の時期は不詳であるが、子供の増加(5人)と成長に合わせて、敷地奥に母屋に連続させた木造2階建と木造3階建ての離れを増築し、延床面積が135㎡から310㎡と建物規模を拡大し、食寝分離と就寝分離を図っている。店舗と住居部分は敷地内の平面や上下階で住商分離の実現を図り店舗環境と居住環境を向上させているが、食事は1階でとっている。

5. まとめ

本稿では魚の棚商店街の継続居住層を対象に間取図とヒアリングにより、住宅の形式(段・列型)から昭和35年頃の住まいと暮らし

表12 増築後の住宅の現況				
		① Z1	② Z3	
1	構造/階数/建築年	木造/2階/S25、S造/2階/S52	木造/2階建/S25、木造/2階～3階/不明	
2	敷地面積/延床面積	90㎡/140㎡	168㎡/310㎡	
3	現在の世帯構成	2人(夫婦)	7人(夫婦、子供5人)	
4	各階室構成	1F	店、和室、炊事場、便所、風呂	
		2F	和室6、和室3	
		離れ	倉庫、和室、DK	
5	調査対象事例各階平面図及び配置図	平成21年頃	平成21年頃	
	【凡例】 店:店舗 作:作業場 和:和室 洋:洋室 台:台所 厨:厨房 事:事務所 浴:浴室 WC:便所 倉:倉庫 納:納戸 炊:炊事場	各階平面図
6	断面図(使い方)			

について把握し、その後の住宅改善行動に伴う変化について事例を通じて考察した。その結果、次のような結果と知見が得られた。

①昭和35年当時の間取りを「段・列型」からみると、間口の狭さのため「1列型」が大半で、「1列2段型」と「1列3段型」の2タイプが大半を占めており、2階建でも室数は5室程度が最大となる。それに対して、家族人数は3世代同居も含めて極めて多く、なおかつ、未明から夕方まで働く従業員の多さに加えて住込み従業員をおく店もある。

②昭和35年当時の住居の使われ方については、「1列3段型」では、1階が「店」と「夫婦あるいは老夫婦の居室」「食事室」で、2階が家族の居室に当てられるが、家族人数によって就寝分離状態が変わってくる(余裕があれば納戸等となる)。「1列2段型」では、1階が「店」と「夫婦あるいは老夫婦の居室兼食事室」(食寝非分離)となり、2階が家族の居室に当てられるが、多くは過密就寝で就寝分離が難しくなっている。いずれの「型」も1階の和室は開店時の食事・休憩場所として利用され、「店(商)」が「住」を圧迫し侵食している。

③アンケート調査では母屋以外の「離れ」については不詳のケースが多いが、ヒアリング対象について「離れ（作業場、倉庫）」がある場合には、住込み従業員の居室もその一角に設けられるケースが多い。住込み従業員が母屋内で居住というケースは今回のヒアリングでは確認できなかった。

④「魚の棚商店街」の生活時間のサイクルは、その名のとおり「魚」のセリに合わせて未明から夕方まで魚の加工製造や商いを営んでいた。それを支援する主婦の労働も極めて多忙で未明から夜遅くまで家事と仕事に追われていた。その魚市場の移転や作業の機械化の進展などによって生活時間のサイクルも変化した。

⑤継続居住層（居住継続型＋一部転出型）の住宅改善行動をみると、増築では「通り庭型」を維持している（あるいは面影を残している）ケースが多く、個室化要求による居室の増築で就寝分離は何とか確保しているが、1階については、改善後も開店時の食事・休憩場所に使用され、住商分離ができず「店（商）」が「住」を侵食している。一方、建替えでは、上階に住居を構え、「階段ホール型」の「n LDK」タイプ住宅へと様変わりし、1階の店舗と完全に分離し上下階で住商分離を図っている。

⑥西山卯三の問題提起に沿って「併用住宅→専用住宅（住商分離）」のプロセスを仮説的に整理すると、「1. 居住地分離」「2. 敷地内平面分離」「3. 敷地内立体分離」の3パターンが考えられるが、魚の棚商店街では「居住地分離（ただし近接地が多い）」が第1位で、「敷地内立体分離」が第2位で続いて「敷地内平面分離」は極めて例外的ということになる。敷地の狭さ故に「店舗拡大」と「住居拡大」の両者を平面的に満たすことが困難ということと理解される。

⑦「居住地分離（近接地）」と「敷地内立体分離」の両者で相当程度の割合を占めるという事実や、世代交代に合わせて子供世代が敷地内に戻るといった事実からは、「住商分離」を図りつつも「近接関係」を維持したいという要求が一定程度存在するものと理解される。

⑧この「近接関係」を維持したいという要求は、家族の生活や店の経営のみでなく、商店街やコミュニティの活性化に対する意識の現れとも考えられる。商店街としての経営努力の動向や中心市街地における民間マンション立地動向をはじめとする都市計画視点も含めて検討を深めることを今後の課題としたい。

謝辞

ヒアリング調査にご協力頂いた魚の棚商店街の皆様、町内会の会長の皆様、そして研究を進めるにあたって指導・助言を頂いた福井大学工学部の関係者の方々には心より感謝申し上げます。

注

注1) 本稿での「居住の継続性」の概念については、デンマークにおける高齢者福祉の三原則の一つである「居住の継続性（慣れ親しんだ地域での人間関係やライフスタイルが継続できること）」にヒントを得ており、「家族生活や自店経営のみでなく商店街活動やコミュニティ活動を含む地域生活の継続」をも含意している。従って、形態的には「自己敷地内での居住継続」だけでなく「コミュニティ範囲内での居住継続」も可能と考えている。

注2) 魚の棚商店街は、約400年前の明石城築城に合わせた町割りでその原型ができ、鮮魚や練り製品、干物の店が集められたのが始まりで、それ以後明石の台所として親しまれている。明石市の中心市街地に位置し、明石市で最も賑わっている商店街である。店舗経営者の交代や業種変更はあっても空き店舗はほとんどない。また、商店街振興組合を組織してお

り、商店街の中央に空き店舗を活用した商店街の拠点「魚の駅」の整備や四季折々のイベントの開催など、商店街活動も活発である。また、当商店街には京都、奈良、阪神間から日帰りの観光客も多く訪れている。

注3) 本論文では、商店街を構成する建築は「専用店舗（非住宅）」と「店舗併用住宅」であると理解した上で、この両者を合わせて「店舗空間」と総称している。また、「店舗空間変容」の基本傾向として「店舗併用住宅の専用店舗化」や「職住分離（住商分離）」の傾向を想定している。

注4) ここでいう中心市街地は明石市中心市街地活性化基本計画に位置付けた60haをさし、これに隣接する町を中心市街地隣接地区という。

注5) 明石市に現存していた昭和30年までに調査された家屋台帳を基に著者が商店街の建物の変化を比較する目的で作図したもので、間取図については個人情報等に配慮し、住まい方の分かる程度の間取図として表示している。敷地境界は戦災復興土地区画整理事業従後を示しているため当時の建物敷地と整合が取れていない部分がある。なお、図面の空白部分は空地ではなく、資料の入手ができないため記載できない部分である。従って、資料の入手状況により、当時の建物すべてが記載されたものではない。

注6) 参考文献⑥p.31の図28「町家の間取、段・列型」に代表される整理方法で1階平面における間口方向の部屋数を列、奥行き方向の部屋数を段とする。なお、正確には「○列○段通り庭型」と呼ぶべきであるが、調査事例はいずれも「通り庭型」なので「通り庭」を省略して記述している。なお、西山によって定式化された「段・列型」については必ずしも伝統的町家に限らず、間口が狭くて奥行きの深い住宅の間取りの分類に対応しうるものと考えている。また結果的には「1列2段型」と「1列3段型」における「生活像（暮らし）」の違いを表現しえたものと考えている。

注7) 住商別棟の住宅の店舗部分については、資料は入手できていないが、経営者へのヒアリングで「住商別棟」であることが判明したものである。図にはヒアリングを基に表示しているため正確なものではない。

注8) 資料の家屋台帳にも記載なく、また都市計画地形図においてもその輪郭が読み取れなかった。

注9) 「貸店舗」の存在や「離れ」周りの増築の様子をみると「2列型」とも考えられるが、貸店舗とは行き来できない間取りとなっており、独立した「1列3段」として、別の併用住宅の取り扱いをしている。

注10) 魚の棚商店街の主要な業種として「鮮魚」があるが、残念ながら鮮魚部門で図面を入手できた事例が少ない。そこで、図面は入手できていないが、鮮魚の「1列3段＋離れ型」でヒアリングによって空間像と生活像の概要を把握できた事例を以下に紹介する。1階は店舗兼事務所、祖父母が寝室として利用していた和室8帖、両親の寝室と食事室を兼ねていた和室（オクドと食堂、その横に風呂）、そして住込み従業員が生活の場として利用していた離れの和室、納屋と続く。2階は、道路側から和室6帖と和室8帖があり、兄弟4人と兄夫婦が就寝し、狭いところに親子三世代10人が雑魚寝状態の食寝非分離で生活していた。また、この事例も一日の生活サイクルは事例5の鮮魚店と同様であったこともヒアリングで確認できている。

注11) 建築計画概要書を基に、協力の得られた物件については現地調査とヒアリングを実施した。敷地については、戦災復興土地区画整理事業による減歩の影響で建物が敷地境界からはみ出る表示となっている部分がある。また、離れについては資料がなく不詳であるため図1には記載していない。ただし、ヒアリングの中で明らかになったものは記載している。

注12) 家屋台帳と建築計画概要書を基に記載した間取図

参考文献

- 1) 嶋田邦男、桜井康宏：「魚の棚商店街」における居住形態変容と住宅改善の実態、日本建築学会計画系論文集、No.615,pp.105～112,2007.5
- 2) 片方信也、柴田巖：西陣における織元住宅の変容に関する研究、日本建築学会計画系論文集報告集、No.420,pp.41～48,1991.2
- 3) 片方信也、小伊藤直哉他3名：京都のインナーエリアにおける居住地の空間構成に関する研究、日本建築学会計画系論文集報告集、No.421,pp.75～82,1991.3
- 4) 清水肇、坂東亜希子、片方信也他4名：京都市中心部における併用住宅の住み方と改善の経歴に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.456,pp.189～198,1994.2
- 5) 坂東亜希子、清水肇、小伊藤直哉、片方信也：ライフステージにみる住宅改善行為につながる住み方に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.462,pp.117～125,1994.8
- 6) 西山卯三：日本の住まいⅠ（増補版）、勁草書房 p.29 1975.5(1989.3 増補)

Kunio SHIMADA and Yasuhiro SAKURAI***

* AKASHI City Government

** Prof. Emeritus, Fukui Univ., Dr. Eng.

UONOTANA SHOPPING St. has been maintained the strong character and the liveliness in the inner city area of Akashi City. The main purpose of this study is to examine the transformation of store space in UONOTANA SHOPPING St. from about 1960 to the present, from a standpoint of that the continuity of residence is important for the shopping mall activation. This paper firstly tries to grasp the images of space and life, i.e. the types of housing layout and the lifestyle, in UONOTANA SHOPPING St. at the time of 1960, and then examines the change of space in the housing improvement action of the residents who has been continued to live in same sites through some examples. The main conclusions are as follows.

Judging from the whole of Figure 1, the depth of the north side blocks (Block ①②) are deeper than south side blocks (Block ③④⑤⑥), and the most houses had the layouts of "townhouse of multi-layered room layout with Toriniwa passage". Many exclusive stores of small scale were concentrated in the southeast Block ⑥. In addition, it is presumed that there were many "detached room" in the depths of the floor plan, although they are not identified.

Table 7 and 8 show the relations between the room layout of townhouse and the transformation of residential form, and between the room layout townhouse and the housing improvement action. As the result, "continuous residence" and "enlargement" are remarkable in "one line by two rows" layout than in "one line by three rows" layout. Figure 2 shows apparent tendency of expansion of the building area and the increase of exclusive use of the first floor as store space.

The most of the layout of multi-layered rooms of townhouse in UONOTANA SHOPPING St. around 1960 were “one line by two rows” and “one line by three rows”. There was no clear distinction between the store space and the residential space in houses, and the residential environment was really poor. After the housing improvement action, expanded houses have been maintained the layout of "Toriniwa passage" style, or retain some of its characteristics, while the rebuilt houses changed to the "n-LDK" type with “staircase hall”.

“UO” of UONOTANA SHOPPING St. means “fish”. The time cycle of living there had been ran adjusting to the fish auction, from the early morning to the evening. Fish business was extremely busy and the housewives worked very hard to support the business. They had always pushed for housework and business work from the dawn to the late night. However, the time cycle of their lives has changed by the moving of the fish market and the progress of mechanization.

It is hypothetically presumed that there are three patterns in the process of separation of residential and store spaces; the "separation of residential location", "separation in plan layout in site" and "vertical separation in site". In UONOTANA SHOPPING St., the "separation of residential location (though in proximity)" is the most cases followed by "vertical separation in site", while "separation in plan layout in site" is extremely rare.

(2014年5月1日原稿受理, 2014年10月24日採用決定)